

日本語の「手」を使う慣用句の研究

(統語論と意味論)



ナンシー クリスティナ ハリム

1142002

マラナタ・キリスト教大学

文学部・日本文学科

バンドン

2015

1. 序論

各国には様々な慣用句があり、日本語も含まれる。慣用句は日常会話や歌詞や小説などでよく使われ、慣用句は一般的な句と同じ構造を持つ。構造を変えれば、慣用句の意味が変わったり、文法的意味がなかったり、複合語になったりする。慣用句は意味が二つあり、その二つの意味は語彙的意味と文法的意味である。語彙的意味は文法的意味と違い、語彙的意味はある語が（語彙項目として）文脈とは独立して表す概念や内容のことであり、文法的意味はある語が文の中で担う役割（によって与えられる意味）のことである。日本語には様々な物から形成した慣用句が多い、特に体から形成した慣用句は多くあると述べている。体から形成した慣用句は例えば、「頭」や「手」や「足」などである。この研究は「手」を使う慣用句を研究する。

この研究の目的は:

1. 「手」を使う慣用句の構造を説明する。
2. 「手」を使う慣用句の「手」の意味を説明する。

2. 本論

ここで「手」を使う慣用句について集めたデータを説明する。

1. 明日は手が空くから、久しぶりに子供と遊ぶつもりだ。

(*Reikai Kanyouku Jiten*, 1992:416)

上にある文には「手が空く」という慣用句がある。その慣用句の構造は:

手		が		空く
-----	+	-----	+	-----
名詞		助詞		自動詞

語彙的意味の「手が空く」は手の平に何もないという意味である。文法的意味では一つの仕事が終わって、ひまになるという意味である。

(*Reikai Kanyouku Jiten*, 1992:416)

「手が空く」の構造を変えれば、例えば動詞が「手」の前にあり、助詞がなければ、「空手」という複合語になる。

2. このくらいのことで手を上げるとは情けないぞ。

(*Reikai Kanyouku Jiten*, 1992:283)

3. 理由はどうあれ子供に手を上げるのはいかん。

(Yahoo, you*33 - 2008年11月1日, 17:39)

「手を上げる」という慣用句の構造は:

手		を		上げる
-----	+	-----	+	-----
名詞		助詞		他動詞

二つの文にある慣用句が同じであるが、それぞれの文法的意味が違う。

「手を上げる」の語彙的意味は手を上に上げるという意味である。

「手を上げる」の文法的意味は:

(1) 殴ろうとして拳を振りあげる。なぐったりなどの乱暴をする。
(*Kotowaza Dai Jiten*, 1992:770)

(2) 降参する。なすすべがなくなって、途中で投げ出す。
(*Reikai Kanyouku Jiten*, 1992:430)

その慣用句の構造を変えれば（動詞が「手」の前にあり、助詞を消す）、「上げる手」になる。語彙的意味が同じであるが、文法的意味がなくなる。

4. 彼は昔から手が長いといううわさだから、付き合うときは注意したほうがいいよ。
(*Reikai Kanyouku Jiten*, 1992:294)

上にある例文には「手が長い」という慣用句である。慣用句の構造は:

手		が		長い
名詞	+	助詞	+	形容詞

「手が長い」という慣用句の語彙的意味は手の長さを述べている。文法的意味では盗み癖があるという意味である (*Reikai Kanyouku Jiten*, 1992:294)。2番と3番の例文と同じであり、構造を変えれば、語彙的意味が変化しないが、文法的意味がなくなる。

3. 結論

1. 慣用句の一般的な構造は：

手		に・が・を		自動詞・他動詞・形容詞
名詞	+	助詞	+	

慣用句の構造が違えば（手が動詞の後ろにあったり、助詞がなかったりする）、慣用句の語彙的意味は同じであるが、文法的意味が変化し、複合語になる。

2. 「手」を使う慣用句の「手」の意味は手だけではなく、様々な物を述べている、例えば「時間」や「方法」などである。

DAFTAR ISI

HALAMAN PENGESAHAN.....	i
HALAMAN PERNYATAAN ORISINALITAS.....	ii
PERNYATAAN PUBLIKASI SKRIPSI.....	iii
KATA PENGANTAR.....	iv
DAFTAR ISI.....	vi
BAB I PENDAHULUAN.....	1
1.1 Latar Belakang Masalah.....	1
1.2 Rumusan Masalah.....	7
1.3 Tujuan Penelitian.....	7
1.4 Metode dan Teknik Penelitian.....	8
1.5 Organisasi Penulisan.....	9
BAB II KAJIAN TEORI.....	11
2.1 Sintaksis.....	11
2.1.1 Frase.....	12
2.1.2 Klausa.....	15
2.1.3 Kalimat.....	18
2.2 Semantik.....	22
2.3 Idiom.....	23
2.4 Kanji '手'.....	26

2.5 Idiom '手'.....	27
2.5.1 Idiom Kanji '手' dalam Kalimat yang Mengandung Kata Kerja.....	28
2.5.2 Idiom Kanji '手' dalam Kalimat yang Mengandung Kata Sifat.....	29
BAB III ANALISIS DATA.....	31
3.1 Idiom Kanji '手' dalam Kalimat yang Mengandung Verba Intransitif.....	31
3.2 Idiom Kanji '手' dalam Kalimat yang Mengandung Verba Transitif.....	40
3.3 Idiom Kanji '手' dalam Kalimat yang Mengandung Kata Sifat.....	66
3.4 Lain-Lain.....	70
BAB IV SIMPULAN.....	74
DAFTAR PUSTAKA.....	76
DAFTAR KAMUS.....	78
LAMPIRAN.....	viii
SINOPSIS.....	xix
RIWAYAT HIDUP PENULIS.....	xxiii